The NEWS for Pharmacy Students

昭和大学薬学部
The News 薬学便り　第33号
発行日：令和4年7月19日
発行者：学部長 中村 明弘
編　集：薬学部広報委員会
（編集責任者 谷岡 利裕）

「講座再編と新部門紹介」

Contents

✧講座再編と新部門設置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1頁
✧着任された先生方のコメント紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2〜4頁

講座再編と新部門設置

昭和大学薬学部
学部長　中村 明弘

「日本一の薬学部を目指した組織改編～臨床薬剤師育成システムの強化～」

薬学部の教育研究組織は令和元年度までは6講座18部門でしたが、令和2年度以降に全体を「臨床系」と「基盤系」に再編するとともに、部門の新設・統合を行いました。日本一の薬学部を目指して「臨床薬剤師育成システム」を強化するために行った組織改編は以下の通りです。

1. 全講座を「臨床系」と「基盤系」に再編

「臨床系」は「病院薬剤学講座」と「臨床薬学講座（8部門）」の2講座です。「病院薬剤学講座」には本学附属8病院の薬剤師のうち約110名が教育職員として所属し、臨床・教育・研究に取り組んでいます。「基盤系」は「薬学教育学講座（2部門）」、「基礎薬学講座（5部門）」、「基礎医療薬学講座（5部門）」、「社会健康薬学講座（3部門）」の4講座15部門で構成されています。「臨床系」と「基盤系」が連携・協力して教育・研究・臨床活動を推進します。

2. 新世代の臨床薬剤師の育成を目指し8部門を新設

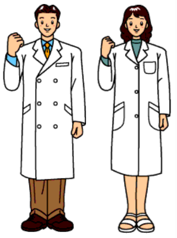
日本一の臨床薬剤師育成システムを構築するため、今後の教育研究に必要とされる領域を考えて8部門を新設しました。まず、薬学教育の充実・向上および改革を推進するため、「薬学教育学講座」に「教育企画・評価学部門」と「教育実践学部門」を設置しました。次に、臨床での実践力および問題発見・解決能力を高めるため「臨床薬学講座」に4部門を新設しました。臨床での栄養療法および基礎栄養学については「臨床栄養代謝学部門」、臨床研究および医薬品開発については「臨床研究開発学部門」、臨床での病態解明については「臨床病態学部門」、医薬品の適正使用推進は「医薬品適正使用学部門」が担当します。人体の構造と機能に関する教育研究を充実するため基礎薬学講座に「生理学部門」を設置しました。「社会健康薬学講座」には、人の集団における薬物の使用とその効果や影響を研究する学問である「薬剤疫学部門」を新設し、データサイエンスの教育研究を推進します。

系	講　座	部　門
基盤系	薬学教育学講座	教育実践学部門　※R2
		教育企画・評価学部門　※R2
	基礎薬学講座	医薬化学部門　※R3
		生体分析化学部門
		生物物理化学部門
		生物化学部門
		腫瘍細胞生物学部門
	基礎医療薬学講座	毒物学部門
		薬理学部門
		薬剤学部門
		薬物動態学部門
		生理学部門　※R3
	社会健康薬学講座	社会薬学部門
		衛生薬学部門
		薬剤疫学部門　※R4

系	講　座	部　門
臨床系	臨床薬学講座	薬物治療学部門
		天然医薬治療学部門
		感染制御薬学部門
		がんゲノム医療薬学部門
		臨床栄養代謝学部門　※R3
		臨床研究開発学部門　※R3
		臨床病態学部門　※R4
		医薬品適正使用学部門　※R4
	病院薬剤学講座	

※R2～4：令和2～4年度の各年度に設置

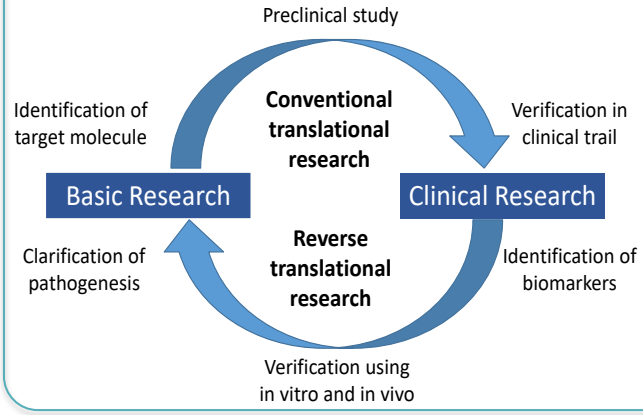
「医薬化学部門」は薬化学部門と薬品製造化学部門を統合



臨床病態学の目指すところ

臨床病態学部門
教授　磯﨑 健男

2022年4月より臨床薬学講座臨床病態学部門教授を拝命いたしました磯﨑健男です。私は2002年に本学医学部を卒業し、第一内科学教室に入局をいたしました。なかでも全身臓器にわたる疾患であるリウマチ膠原病を笠間先生（現・リウマチ膠原病内科教授）のもと専攻して研究・教育・臨床を進めてまいりました。2010年から2年7か月にわたり米国ミシガン大学リウマチ内科にて、サイトカイン・ケモカインと血管新生にフォーカスをして研究を行っておりました。2015年から製薬企業にて抗リウマチ薬であるJAK阻害薬の開発に携わる仕事をしたことは特異な点かもしれません。2016年からは本学リウマチ膠原病内科にて引き続き臨床と関節リウマチや乾癬性関節炎でのサイトカイン・ケモカイン、ADAM familyや糖鎖といった幅広い膠原病に起因する病態の研究を行ってきました。



これまでの経験を活かし至誠一貫の精神のもと質の高い患者本位のチーム医療を行う臨床薬剤師の育成のため、臨床推論や実際の患者さんに接する機会などを通し学部生には治療薬の選択に関わる病態の理解できる場を提供したいと考えております。また、将来基礎研究に興味を持つ研究者を育てるための生物化学の一歩を学ぶ機会を作ってまいります。研究面においてもbenchside to bedsideの考え方からbedside to benchsideとして臨床での疑問を解決するための手段としてreverse translational researchとして解決し、患者さんに還元できる研究をすすめていく所存です。これから何卒よろしくお願い申し上げます。

臨床を楽しくする生理学

生理学部門
講師　上條 翔太郎

薬学部の学生の皆様、教育職員ならびに関係職員の皆様、はじめまして。上條翔太郎と申します。2022年2月に生理・病態学部門から生理分野が切り離されるようにして生理学部門が新設され、着任いたしました。学生の皆さんは想像と反するかもしれませんが、整形外科の患者さんはほとんどが高齢者です。入院される患者さんは種類も数も多くの薬を内服しておりました。その全てを主治医だけで管理するのは難しく、薬剤師の皆様には助けていただくとともに、一緒に患者さんを診ていただきました。整形外科では救急、周術期、急性・慢性疼痛、内科疾患など多くのことを勉強させていただきました。臨床医の経験と、生理学という人体の仕組みを学ぶ領域を掛け合わせて、人体・臨床に興味を持ってもらえる講義・教育を行っていきたいと思います。昭和大学薬学部が掲げる臨床薬剤師教育に精一杯取り組みたいと思います。一方で、運動が大好きで、研究では運動（ランニング）が人体（筋肉・骨・認知症）に与える影響を調べています。教室は生協から階段を上ってすぐですので、多くの方に教室に来ていただきたいと思っております。私もキャンパスで挨拶をいたしますので、皆様も是非気兼ねなくお声かけください。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

経歴
2013年　昭和大学医学部卒業
2015年　昭和大学医学部整形外科学講座
2020年　昭和大学医学部生理学講座生体調節機能学部門
2022年　昭和大学薬学部基礎医療薬学講座生理学部門

2号館地下1階（B-06）　内線：8214
1号館3階と生協をつなぐ階段の途中の踊り場から2号館に入ったところです.

代謝栄養学と臨床薬剤師

臨床栄養代謝学部門
教授　千葉 正博

近年は高齢化社会の到来に伴い、栄養障害に伴うフレイル・サルコペニアの発症が問題視されるようになってきました。また医療の場でも栄養・代謝を考慮した全身管理が予後向上あるいは合併症発症率の低下と密接な関係にあることが示唆されるようになり、NST（栄養サポートチーム）が多くの病院で活躍するようになってきました。このように、栄養代謝学は予防医学の面からも、患者の全身状態を把握し治療をより良く進めるための臨床医学の面からも必要とされる学問です。

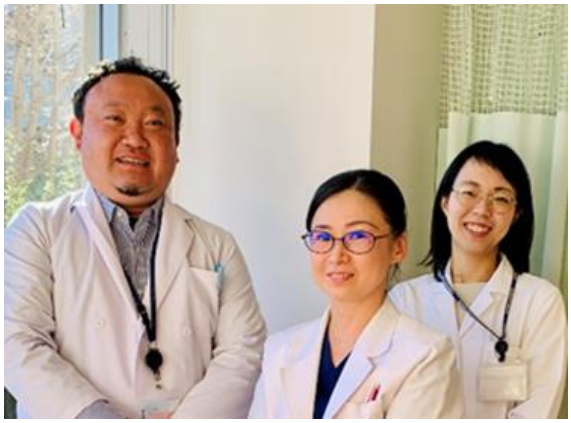
例えば臨床薬剤師としては、低栄養に伴うたんぱく質摂取量・合成の低下は血清アルブミンの低下をきたし、アスピリンやワルファリンなどの酸性薬物の副作用発症を助長する可能性があること、運動量が低下することで内臓脂肪量（体脂肪率）が増加するとフェンタニルなどの脂溶性薬剤は蓄積される可能性が高くなることなど知っておいてほしい知識となります。しかし、残念ながらこれらを系統立てて学ぶ機会が大学コアカリキュラムには存在しないのが現状でした。このような背景のもと、当研究室は2021年に新たに設立されました。将来現場で即戦力となる臨床薬剤師育成をモットーに、医系総合大学である特色を生かした多職種連携教育を取り入れつつ、臨床栄養学の幅広い知識と考え方を身につけられるよう取り組んでいます。どうぞ宜しくお願いいたします。

アンメット・メディカルニーズの解決に向けて

臨床研究開発学部門
准教授　肥田 典子

皆様、はじめまして。昨年9月から臨床研究開発学部門の准教授を拝命しました肥田典子です。私はこれまで、医学部薬理学講座臨床薬理学部門の教員として、医薬品開発に関連する業務に取り組んでまいりました。

臨床研究開発学部門は、臨床薬理研究所（烏山病院内）で研究活動を行っています。臨床薬理研究所では、新規医薬品の治験のほか、病気の診断、治療の改善を常に試みるためのさまざまな研究をおこなっています。研究により新しい治療法を確立することは大学病院をはじめとする臨床研究を実施する医療機関の使命であり、患者さんの協力により成し遂げることができるものです。



私たちは、特に小児、高齢者、嚥下困難者における未解決の医療上の問題（アンメットメディカルニーズ）の解決を目指し、昭和大学薬学部・医学部の他の研究室と連携し、患者さんの「不便」や「困った」を解決できるような研究成果を出していきたいと思っています。 先生方が臨床現場で感じる「不便なこと」や患者さんが「困っていること」を解決するための臨床研究の方法についてのご相談も承ります。旗の台キャンパスでの勤務時は、臨床薬理研究所・臨床研究開発学部門 分室（2号館地下1階（旧医薬品評価薬学部門））におりますので、是非お気軽にお声がけいただければ嬉しいです。

（写真は左から山崎 太義講師、肥田、滝 伊織助教）

患者さんから学ぶ病院薬剤学

病院薬剤学講座
教授　田中 克巳

4月1日より病院薬剤学講座教授・統括薬剤部長となりました田中克巳です。皆さん、どうぞ宜しくお願いいたします。

「患者さんから学ぶ」病院薬剤師であり続けたいですし、医師や看護師とチーム医療を行いつつ臨床的な疑問について解決できるような医療人でありたいと思っています。

病院薬剤学講座は、2010年に開講して以降、そのスタッフ（病院薬剤師）は病院での日常業務以外に、教育や研究にも尽力し、業務の中から湧き出る臨床上の疑問を解決すべく課題や研究テーマに取り組んでいます。講座を支える教育職員は、142名（2022年4月現在）と、国内医療系大学でも類をみません。病院薬剤師が卒後の臨床研修薬剤師教育はもちろん薬学教育（病院実習1と2、精神医療実習等）にも携わり、私たち自身も優れた医療人となるべく切磋琢磨する毎日です。皆さん、病院実習では是非、病院薬剤師に色々気軽に尋ねてみてください。当講座にも興味をもって頂けるよう期待しています！

病院薬剤学講座教授・統括薬剤部長　田中克巳

・1988年3月　昭和大学 薬学部 薬学科 卒業
・1988年4月　昭和大学病院　研修生（6か月間）
・同年10月　昭和大学病院 薬剤部入職
　大学病院では、調剤（処方、注射）、病棟業務、TDM・医薬品試験（薬毒物中毒原因物質の分析等）を担当
・2010年4月　PMDA安全第二部・安全第一部へ在籍出向(2年間)
・2012年4月　昭和大学病院復職、医療安全部門　医薬品安全管理責任者兼務
・2016年10月　昭和大学 江東豊洲病院 勤務（薬剤部長・病院薬剤学講座講師）
・2022年4月より現職に至る

これからの薬剤疫学

薬剤疫学部門
教授　今井 志乃ぶ

はじめまして。

この度、薬剤疫学部門の教授を拝命しました。

【薬剤疫学とは】

「人の集団における医薬品の使用とその効果や影響を研究する学問」と定義されます。臨床薬学の様に、患者個々に最適な薬物治療を推進することに対し、大きな集団での評価を行う点が特徴です。集団から、薬物治療の有効性、安全性、経済性に関わる情報を社会へ還元するために、疫学的な手法を用います。

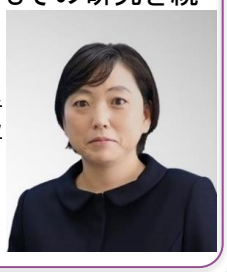
【教育の目標】

☺ 薬物治療の変化を数値でとらえられる薬剤師の養成
☺ 社会のニーズと情報の変化を捉えられる薬剤師の養成
☺ 薬物治療に関する科学的根拠を創出できる薬剤師の養成
☺ 多様な社会の要請に従って医療系ビッグデータを適切な手法で評価できる薬剤師の養成

【経歴】

北里大学薬学部を卒業後、東大病院の研修生として薬剤師のキャリアをスタートしました。東京医科歯科大学大学院病院管理学コース修士課程、同大学院医療政策情報学講座博士課程にて研究手法を習得し、大規模データから医療の実態を明らかにすることを主な研究テーマとしてきました。

国立大学病院データベースセンターや、国立病院機構本部総合研究センターで、薬剤疫学手法を用いた研究に従事してきました。また、Gothenburg University (Sweden)に一年間研究員として在籍し、日本とスウェーデンにおける医薬品を取り巻く環境の違いを、大規模データで比較する研究に携わり、今でもその研究を続けています。



医療系ビッグデータにご興味のある先生方並びに学生さんは、是非、お声掛けください。

よろしくお願いいたします。

編集後記

医療技術は日進月歩の進化を遂げており、薬剤師に求められるスキルもまた日々拡大しています。今回の組織改編は、皆さんが将来臨床現場で求められるであろうスキルの幅を広げるための新たな薬学教育を可能にするものとなるでしょう。

そんな教育の昭和における、臨床薬剤師育成システム構築の推進を担う薬学教育学講座については、次号以降また改めて特集したいと思います。 Y. Wat

第33号編集委員：渡邉雄一、永田和弘
The News編集委員：小濵孝士　熊木良太
栗原竜也　桑田 浩　小林 文　佐々木由香
滝 伊織　谷岡利裕